

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

平成4年5月29日

気 象 庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会の統一見解

雲仙岳では、3月下旬に第6ドームの西側で第7ドームが成長を始め、第5ドーム付近の隆起も依然として続いている。航空写真測量によれば、昨年5月から今年4月下旬までの溶岩の総噴出量は9千4百万 m^3 に達した。また、2月19日から4月25日までの期間の1日当りの溶岩噴出量は約18万 m^3 であり、それまでの約30万 m^3 より低下した。一方、目視観測によれば、3月下旬から4月中旬にかけて一時噴出量が低下したが、その後は再び噴出量が増加している。

溶岩ドームの崩落による火砕流は相変わらず続いており、赤松谷方向を主とし、水無川、おしが谷にも流下している。おしが谷への火砕流は第5ドームからの崩落によるものである。4月1日と4日には水無川沿いに約3 km流下して北上木場に達する火砕流があった。

昨年10月下旬に始まった地震活動は消長を繰り返しつつ長期にわたって続いており、3月下旬には一時著しく多発したが、最近2か月は以前に比べるとやや少なくなった。震源分布は溶岩ドーム及びその直下に集中しており、特に変化は見られない。

普賢岳南側及び北側の光波距離測量では、2月から4月下旬にかけて縮みが一時鈍化したことが、依然として縮みが続いている。5月に行われた島原半島西海岸の水準測量では、前回2月の結果同様沈降が続いており、2月以後の沈降量は最大1.4 cmであった。3月と5月に行われた島原半島西部での距離測量によれば、昨年後半以降収縮傾向が観測されている。

地磁気観測では山頂部の消磁を示す変化が続いていたが、2月頃からそれが鈍化し始めた。これは火口直下で温度上昇が鈍り始めたためと考えることができる。火口から放出される二酸化硫黄の量は1月までほぼ一定であったが、3月と5月の測定では半分程度に減少した。

このように、幾つかの観測データにはこの数か月に若干の変化が見られるが、総合的には従来の傾向に大きな変化はなく、活発な火山活動が依然として続いていると考えられる。

以上のことから、規模の大きな火砕流も含め、今後も火山活動に厳重な警戒が必要である。

なお、降雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。